

<研究ノート>

カウツキー版『資本論』における Exploitation の Ausbeutung
への言い換えについて

——内田義彦のアウスボイトゥング（搾取）論からの一考察——

山口 拓 美

目 次

1. 問題の所在
2. 『資本論』以前
3. マルクス版『資本論』
4. エンゲルス版『資本論』
5. カウツキー版『資本論』
6. 結論

1. 問題の所在

内田義彦は、名著『資本論の世界』（1966）の中で次のように述べている。

こうした疎外論を中心にする初期マルクスの研究の深化で、マルクスその人についての——さきほど河上を引き合いに出しましたような——素朴な誤解はなくなりました。また、『資本論』の用語でも、初期マルクスの問題の立て方や方法を追って考えなおしてみますと、より深く理解できることも多い。たとえば、搾取（アウスボイトゥング）という言葉がそうでありませぬ。

搾取といえば、マルクス経済学の用語としてあまりにも自明な言葉になっておりますけれども、人間の搾取だけかというところではない。アウス——し尽くす——という接頭語がなかなか微妙な意味内容を含んでおりますが、野を耕すとか、鉱山を掘りつくすことでありまして、自然科学者の話をきいておりますと、今日はアウスボイテが有ったとか無かったとかいってあります。自然に問いかけて成果が有ったとか無かったとかいう程の意味でしょう。経済学の方で常識になっているのと別の意味内容をアウスボイトゥングという言葉はもっている。疎外という発想とむすびつけて『資本論』の搾取概念をみますと、その二つの意味内容をもたせながら使われているのがよく解ります。人間が自然に働きかけて得た成果が、実際には他の人間（資本家）のものになる。なるだけでなくって資本として、作った人間に対立している。こういう二重の意味をふくんでいるわけです。しかも、こうした搾取の成果たる資本が一人歩きをして

いて、その一人歩きの中で、また、自然の搾取が人間の搾取とともに、アウス=徹底的に、あるいは十分にとか、なくしちゃうという複雑な意味内容を含めて、行なわれている。その極限が原子力による人間の徹底的な地球の支配であり、あるいは原子爆弾による人間と地球そのものの徹底的な破壊であることは、さきほど申し上げましたが、人間が自然を徹底的に利用する、あるいは資本が人間を動かして人間と自然を徹底的に掘り尽くす——そうした状況をうつしとる『資本論』の世界が、初期マルクスを通りますと、よく解ります。(内田1966, 16-17頁)

内田のこのアウスボイトゥング論は、当時進行していた世界の原子力開発や日本の公害問題を背景として展開されたものだが、人間の搾取と自然の搾取を統一的に把握する彼の立論は、その後のチェルノブイリ原発事故、地球規模の環境破壊、福島原子力災害に伴う環境汚染等にもそのまま通用する鋭い批判力を保持しており、『資本論』の思想に基づいて環境経済を批判的に分析しようとする場合、改めて参照されるべき議論であると言える。内田に倣い私も、例えば原子力災害が顕わにした人間と自然の徹底的利用について、『資本論』の理論に遡りつつ批判的に論じたいと考えてきた。現今の気候危機に対しても、内田のアウスボイトゥング論は、重要な示唆を与えてくれているように思われる。

しかし、内田のアウスボイトゥング論に導かれて、ドイツ語で書かれた『資本論』の原書を紐解いてみると、搾取の原語は必ずしもアウスボイトゥング *Ausbeutung* とは言えないことに気付く。すなわち、内田が主として用いた版本は、『経済学の生誕』の注に出ているマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によるドイツ語版であると考えられるが(内田1962, 16頁)、この版によると『資本論』第1巻第7章第1節の表題「労働力の搾取度」は *Der Exploitationsgrad der Arbeitskraft* であって、*Ausbeutungsgrad* ではない(Marx 1947, 220頁)。また、同第8章第3節の表題「搾取の法的制限のないイギリスの産業諸部門」の中の「搾取」も *Exploitation* であって、*Ausbeutung* ではない(同上 252頁)。もちろん、『資本論』の本文中では *Ausbeutung* も使用されているが、搾取が主題となる剰余価値論では *Ausbeutung* よりも *Exploitation* の方がより多く使用されている。さらに、「自然の搾取」と関連が深いと思われる『資本論』第3巻の「地代論」でも、*Exploitation* の方がより多く使用されている。そしてこのような事情は、マルクス自身が出版した『資本論』第1巻の初版と第2版、エンゲルスが編集した同第3版と第4版、および『資本論』第3巻においても同様である。つまり、マルクスが執筆しエンゲルスが編集した『資本論』では、搾取の原語は主として *Exploitation* であって、*Ausbeutung* の方はむしろ脇役のような位置付けであると言えるのである。しかし、それにもかかわらず内田は、搾取をアウスボイトゥングと記し、*Ausbeutung* の語義に即して人間と自然の搾取論を展開した。これは、なぜであろうか。

本稿では、マルクスの死後、エンゲルスが行った『資本論』の編集と、エンゲルスの死後、カウツキーが行った『資本論』の再編集の中で、*Exploitation* と *Ausbeutung* がどのように取り扱

われたのかを振り返る。その上で、内田義彦のアウスボイトウング論の意義を再検討する。

2. 『資本論』以前

マルクスが刊行した文献の中に Exploitation と Ausbeutung という2つの語が出現するのは、もちろん『資本論』が初めてではない。すでに『共産党宣言』において両語が使用されており、この書を通じてこれらの語が表す概念も世界各国に普及した。そこで、はじめにまず、『共産党宣言』に遡って Exploitation と Ausbeutung の使用例を見ておくことが必要であると思われる。

『共産党宣言』を改めて調べてみると、そこでは Exploitation がその動詞形を含めて4回使われているのが分かる。その一方、Ausbeutung の方は動詞形を含めて14回も使用されている。したがって『共産党宣言』の時点では、「搾取」の意味を伝える語としては Ausbeutung が主役であって、Exploitation の方は控えめに顔を出さず程度の、脇役としての位置付けであったとすることができる。しかし、そのような位置付けであったとしても、なぜマルクス（とエンゲルス）はドイツ語文献の中で、わざわざフランス語からの借用語である Exploitation を使用したのであるうか。

考えられる理由としては、第1に、マルクスが『共産党宣言』を執筆する少し前に『哲学の貧困』をフランス語で書いていた、という事情があげられる。『共産党宣言』の初版は1848年2月に出版されているが、起草に着手されたのは1847年12月であり、『哲学の貧困』が刊行されたのは、それから少し前の1847年7月であった。プルードンの『貧困の哲学』を批判したこの著書は、マルクスとしては自身の経済学と歴史認識を活字化した初めての単著であり、しかもそれはフランス語で執筆された。その後、それほど間を置かずに書きはじめられたのが『共産党宣言』であったことから、同書の中にフランス語由来の用語が使われたとしてもそれほど不思議なことではない。実際、『哲学の貧困』の中ではしばしば exploitation が使用されており、特に「所有あるいは地代」の節の中に、この語が名詞形および動詞形で頻出する。

第2に、1845年から1846年に書かれた『ドイツ・イデオロギー』の「聖マックス」で、exploitieren や Exploitation が好んで使われていた、という事情もあげられる。特に「聖マックス」の中の“Moral, Verkehr, Exploitationstheorie”と題された節には Exploitation が頻出するだけでなく、exploitation de l'homme par l'homme というフランス語のフレーズも挿入されている (Marx and Engels 1958, 394 頁)。これはサン＝シモン主義の歴史認識を集約する批判的標語の1つであるが、この exploitation という語が association と並ぶフランス社会主義のキーワードであったことを考え合わせれば、この思想から多くを学んだマルクスが『共産党宣言』で Exploitation を使用したのは自然なことであったと思われる。

一方、マルクスが執筆した労働運動上のもう1つの重要文書である1864年の「国際労働者協会創立宣言」には、exploitation という語は出てこない。これはなぜであろうか。おそらくその理由の1つは、この「宣言」が英語で執筆されたからであると思われる。というのも、この時点

では *exploitation* はまだ英語世界に定着していなかったと考えられるからである。この事情は、マルクスが1865年にロンドンで行った講演 “Value, price and profit” の中で次のように述べていることから推察できる。

The first mode of expressing the rate of profit is the only one which shows you the real ratio between paid and unpaid labour, the real degree of the *exploitation* (you must allow me this French word) of labour. (Marx and Engels 1992, 175 頁)

英語世界では、*exploitation* は1865年においてもまだフランス語だったわけである。これは、*exploitation* が英単語として定着し、日常語にすらなっている現代からすると奇妙に見えるが、少なくともこの時期のマルクスの意識において、*exploitation* という語は French word だったのであり、英語で講演する講師として、その使用の許可を聴衆に求める必要が感じられる語だったのである。そして、おそらくこのような事情から、1850年に雑誌に掲載された『共産党宣言』の最初の英訳では、*Exploitation* も *Ausbeutung* も、その英訳語として主に *using up* が用いられ、*exploitation* が出現するのは1回だけ——しかもその直後に括弧で括られた *using up* を伴って——であった(橋本2016, 286-287頁)のであろうと推察される。

1864年の「国際労働者協会創立宣言」に戻れば、マルクスはこれをドイツ語に訳しているが、このドイツ語版には1個所で *Ausbeutung* が使用されている (Marx and Engels 1992, 24頁)。それは、英語版では *extortion* に対応する個所である (同上10頁)。ここから、マルクスの意識において *Ausbeutung* は *extortion* (強奪) という意味も持っていた、ということが推測できる。

いずれにしても、『共産党宣言』においては、「搾取」に対応する語としては、*Exploitation* よりも *Ausbeutung* の方がはるかに多く使用されていたのである。また、同じことは、ほぼ同時期に書かれた『賃労働と資本』についても言える。しかし、『資本論』第1巻では両者の立場が逆転することになる。

3. マルクス版『資本論』

マルクス自身の手による『資本論』は、1867年に出版された第1巻初版と、1872年から1873年にかけて分冊方式で刊行された第1巻第2版がそれである。1872年から1875年にかけて分冊刊行されたフランス語版『資本論』第1巻も、ジョゼフ・ロワによる翻訳とはいえ、マルクスによって校閲され、大幅な加筆修正が加えられていることから、マルクスの手による『資本論』であると言える。しかし、『資本論』のオリジナルは、著者の母国語で書かれたドイツ語版でなければならないとすれば、マルクス版『資本論』については、第1巻第2版がその最終版であるということになる。そこで、ここではこのマルクスによるドイツ語最終版に基づいて、

Exploitation と Ausbeutung の使用例を確認することとしたい。なお、本項の以下の部分では、邦訳文についてはエンゲルス編集のドイツ語第4版を主たる底本とする1997年の資本論翻訳委員会訳を使用しているが、それらはマルクス版とエンゲルス版との間に異同がないドイツ語原文についての訳文であることをここで断りしておく。

さて、すでに触れたように、マルクス版『資本論』第1巻第3篇第7章第1節の表題「労働力の搾取度」の原文は、Der Exploitationsgrad der Arbeitskraft である。また、この節の中に「剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の、搾取度の正確な表現である」（マルクス1997a, 370頁）という文があり、これはマルクスによる「労働力の搾取度」の定義と言ってよいものであるが、原語は Exploitationsgrad である (Marx and Engels 1987, 227頁)。さらに、この文に付された「第2版への注」は、次のように、労働力の「搾取」そのものの定義と考えることができる重要な解説文となっている。

剰余価値率は、労働力の搾取度の正確な表現であるとはいえ、搾取の絶対的な大きさの表現では決してない。たとえば、必要労働が五時間で剰余労働が五時間であれば、搾取度は100%である。ここでは搾取の大きさは五時間ではかられる。これに対して、必要労働が六時間で剰余労働が六時間であれば、100%という搾取度は不変のままであるが、他方、搾取の大きさは五時間から六時間に20%だけ増大する。(マルクス1997a, 370-371頁)

ここに出ている「搾取」の原語は、すべて Exploitation である (Marx and Engels 1987, 227頁)。第7章「剰余価値率」全体で見ても、使われているのは Exploitation であって、Ausbeutung は名詞形でも動詞形でも一度も使われていない。

第3篇第8章第3節の表題は「搾取の法的制限のないイギリスの産業諸部門」であるが、すでに見たように、この表題の中の「搾取」も Exploitation であり、同節の本文中においても、使用されているのは Exploitation の動詞形である (Marx and Engels 1987, 249, 250, 258頁)。第3篇「絶対的剰余価値の生産」の中で Ausbeutung が使用されている箇所としては次の文がある。

彼が自分の労働力を自由に売る時間は、彼がそれを売ることを強制されている時間であること、実際に、彼の吸収者は「一片の筋肉、一本の腱、一滴の血でもなお搾取することができる限り」手放しはしないことが暴露される。(マルクス1997a, 523頁)

ここに現れる「搾取する」は Ausbeutung の動詞形である ausbeuten であるが (Marx and Engels 1987, 302頁)、見てのとおり、この ausbeuten は引用文の中で使用されているものであり、しかもこれはエンゲルスの論説「イギリスの10時間法案」からの引用文である (同上524頁)。次項で見るように、エンゲルスはマルクスとは違って Exploitation ではなく Ausbeutung の

方を使用する傾向があった。

マルクス版『資本論』においても、第4篇「相対的剰余価値の生産」になると、比較的多く *Ausbeutung* を見かけるようになる。例えば、第4篇第11章には次のような文がある。

資本家の指揮は、社会的労働過程の本性から発生し、この過程につきものの一つの特殊な機能であるだけでなく、同時に、社会的労働過程の搾取の機能であり、それゆえ搾取者とその搾取原料〔労働者〕とのあいだの不可避的敵対によって条件づけられている。(マルクス 1997b, 574 頁)

この引用文中の搾取、搾取者、搾取原料は、それぞれ、*Ausbeutung*, *Ausbeuter*, *Rohmaterial seiner Ausbeutung* である (Marx and Engels 1987, 328 頁)。

また、同第13章「機械と大工業」には次のような文がある。

こうして機械は、はじめから、資本の人的搾取材料すなわちもっとも独自の搾取分野と同時に、搾取度をも拡大するのである。(マルクス 1997b, 681 頁)

この引用文中の搾取材料、搾取分野、搾取度は、それぞれ、*Exploitationsmaterial*, *Ausbeutungsfeld*, *Exploitationsgrad* である (Marx and Engels 1987, 385 頁)。

これらを見ると、*Exploitation* と *Ausbeutung* は同等な位置に立つ、置き換え可能な用語であるように見える。しかし、ここで注目したいのは、上記引用文において「搾取度」については原語が *Exploitationsgrad* となっているということである。実際、「搾取度」に焦点が当てられる純理論的な諸章では、専ら *Exploitation* が用いられていて *Ausbeutung* は用いられていない。例えば、第3篇第9章「剰余価値の率と総量」や第5篇第16章「剰余価値率を表わす種々の定式」では、*Exploitation* や *exploitieren*、さらには *Exploiteur* という語も (Marx and Engels 1987, 309 頁) 用いられているが、*Ausbeutung* は、その動詞形等も含めて、一切用いられていない。

こうしたことから、マルクス版『資本論』においては、「剰余労働／必要労働」によって数値化されるところの「搾取度」の正式な用語は *Exploitationsgrad*、剰余労働の長さで表現されるところの「搾取」のそれは *Exploitation* である一方、*Ausbeutung* については、修辭的な言い換えの際に使用される語として、類語的な位置付けを与えられた語であったと言えるように思われる。つまり、マルクス版『資本論』では、フランス語から借用した *Exploitation* が主役で、ドイツ語の *Ausbeutung* は脇役だったのである。しかしこの主役と脇役の関係は、マルクスの後継者たちの手の中で、徐々に逆方向へと回転していくことになる。

4. エンゲルス版『資本論』

マルクスの死後、エンゲルスは『資本論』第1巻を編集し、その第3版を1883年に、第4版を1890年に刊行した。この編集作業の主な目的は、フランス語版『資本論』の校閲の際にマルクスによって新たに加えられていた変更をドイツ語版の中に取り入れることであった。マルクスはロワ訳のフランス語版『資本論』について、「原本とはまったく別な一つの科学的価値をもつものであって、ドイツ語のできる読者によっても参照されてしかるべきものである」（マルクス1997a, 33頁）と述べていたことから、ドイツ語版『資本論』は、このままではフランス語版に比べて不完全なテキストであると見なされ得ることになる。そこでエンゲルスは、「マルクスによってところどころ訂正され、またフランス語版への参照が指示されているドイツ語版」（同上35頁）と「利用すべき個所に彼が正確にしるしをつけたフランス語版」（同上）とを遺品の中から見つけ出し、これらの自用本に記されたマルクスの書き込みを用いて『資本論』第3版を編集した（大村1998, 223頁）。また、『資本論』第4版の編集の際には、「フランス語版とマルクスの自筆の覚え書きとをもう一度比較したのち」、エンゲルスは「前者からさらに若干の追補をドイツ語本文に取り入れた」（マルクス1997a, 46頁）のであった。

その際、フランス語版からの追補の取り入れ作業には、当然のことながらフランス語の文章をドイツ語に翻訳する作業が伴うことになる。これについてエンゲルスは次のように述べている。

追補や補足も、もしマルクスがやったならば、きっともって手を入れ、またなめらかなフランス語を彼独自の簡潔なドイツ語によって置き換えたことであろう。私は、それらの追補や補足を、できるだけもとの原文にそくして翻訳することで満足しなければならなかった。（マルクス1997a, 35頁）

言うまでもなくエンゲルスは語学の達人であり、『資本論』のフランス語をドイツ語に直す翻訳者として彼ほどふさわしい人はいない。とは言え、翻訳の際の訳語選択においては、翻訳者の用語に対する好みが見れることになる。そして、その好みが原著者のそれと一致するとはかぎらない。エンゲルスは、フランス語の *exploitation* をドイツ語に置き換える際、*Exploitation* ではなく *Ausbeutung* を選んでいる。例えば、次のように。

フランス語版

L'exploitation du travailleur par la machine c'est la même chose que l'exploitation des machines par le travailleur. (Marx and Engels 1989a, 380頁)

ドイツ語第3版

Ausbeutung des Arbeiters durch die Maschine ist ihm also identisch mit Ausbeutung der

Maschine durch den Arbeiter. (Marx and Engels 1989b, 430 頁)

また、次のように。

フランス語版

la libre exploitation de l'homme par l'homme (Marx and Engels 1989a, 633 頁)

ドイツ語第3版

der freien Ausbeutung des Menschen durch den Menschen (Marx and Engels 1989b, 669 頁)

もちろん、これらの文は剰余価値率についての理論的分析ではなく、最初の引用文は機械の使用についてのブルジョア経済学批判、2つ目の引用文は産業資本家についての歴史的記述の中に現れる文である。したがって、フランス語の *exploitation* に対応するドイツ語として *Exploitation* ではなく *Ausbeutung* が使われているのは、前項で見たドイツ語第2版におけるマルクスの用語選択の原則に反するものではないと言える。とは言え、上記の2つ目の引用文の *exploitation de l'homme par l'homme* はサン=シモン主義のキャッチフレーズとして有名なものである。仮に、マルクス自身がこの個所を自ら訳していたとしたら、果たしてこの *exploitation* を *Ausbeutung* で置き換えていたであろうか。この点は大いに疑問である。マルクスであれば、ここでは、フランス社会主義に由来する *Exploitation* を用いたのではないかという推測も成り立つように思われる。

いずれにしても、エンゲルスがフランス語版『資本論』からの追補をドイツ語版に加えたことによって、『資本論』第1巻の中の *Ausbeutung* という語の数は増加したのである。

エンゲルスは、マルクスとは異なり、フランス語からの借用語である *Exploitation* を進んで用いることはなかった。彼は、主著の『反デューリング論』で「搾取」と訳される語を多くの個所で使用しているが、それらはいずれも *Ausbeutung* や *Ausbeuter*, *ausgebeutet*, *ausbeutend* 等の *ausbeuten* の派生語である。つまり彼は、専らドイツ語らしいドイツ語である *Ausbeutung* を用いたのである。わずかに『反デューリング』において *Exploitation* が出現するのは次の2箇所である。

いまや収奪されるべきものは、もはや自家経営をいとなむ労働者ではなくて、多くの労働者を搾取する資本家である。(マルクス、エンゲルス 1968, 139 頁)

大工業は、いろいろに変化する資本の搾取欲求に応じるように、困窮した労働者人口が予備として待機しているという奇怪な状態のかわりに、いろいろに変化する労働の必要にたいして人間が絶対的に応じうる状態をおく (同上 303 頁)

ここで、最初の引用文中の「搾取する」の原語は *exploitierende* (Marx and Engels 1962a, 124

頁), 2 番目の引用文中の「搾取欲求」の原語は Exploitationsbedürfnis である (同上 275 頁)。しかしながら, これら 2 つの文はエンゲルスによるものではない。『資本論』第 1 巻第 7 篇第 24 章第 7 節および同第 4 篇第 13 章第 9 節からの引用文であり, したがって当然のことながらマルクスによるものである。エンゲルスは, マルクスの学説を自分の言葉で解説する本文においては専ら Ausbeutung を用いているが, マルクスの文を直接引用する際には, Exploitation を出現させざるをえなかったのである。

ここには, 用語選択におけるマルクスとエンゲルスの相違が如実に現れていると言える。マルクスはフランス語の exploitation を愛好し, この語をドイツ語で本を書く際にも使用したが, エンゲルスにはそのような趣味はなく, むしろドイツ語の Ausbeutung を好んでいた, と推察することができる。

いずれにしても, エンゲルスが『資本論』第 1 巻を編集したことで, 同書の中の Ausbeutung という語の数が, わずかとはいえ増えたのは確かである。そして, このような『資本論』第 1 巻の Ausbeutung 化とも言える作業は, エンゲルスの直弟子であったカール・カウツキーによって一気に推し進められたのである。

5. カウツキー版『資本論』

カウツキーは 1881 年 3 月に初めてロンドンを訪れ, そこに同年 6 月まで滞在した。その間, 「マルクスのもとへはまれにしか行かなかった」が, エンゲルスとはしばしば会い, 「緊密な交際を生じた」(カウツキー 1955, 283 頁)。1885 年に再度ロンドンを訪れた際には長期間滞在し, 「絶えずエンゲルスの貴重な助言を得ながら」(スティーenson 1990, 96 頁)『カール・マルクスの経済学説』を執筆した。1887 年に刊行されたこの書は「『資本論』入門書として第二インターナショナル時代の労働者に広く読まれ, ドイツ語版だけでも 25 版を重ね, 多数の国々や民族の言語にも翻訳された」(カウツキー 1999, 1 頁)。日本においても, 高島素之が『資本論解説』としてこの書の邦訳を 1919 年に出版し, その後に『資本論』の翻訳を完成させている。『資本論』には著しく難解な部分が多々あるため, 分かりやすい入門書が必要だったのである。カウツキー自身, 初めて『資本論』に取り組んだ際には「それに完全に乗り上げてしま」い, しばらく「それから遠ざかった」のであった (カウツキー 1955, 278 頁)。カウツキーは『カール・マルクスの経済学説』について, その初版の草稿がエンゲルスによって「校閲され, 正当なものと認められていた」ことを第 8 版への序文の中に記している (カウツキー 1999, 12 頁)。つまり, 同書はエンゲルスによって認定された『資本論』の正統な入門書なのである。この時代に『資本論』に関心を持ったドイツ人は, また他の多くの国民も, まずこの書を読んでマルクス経済学を学んだわけである。

このように, 『カール・マルクスの経済学説』が労働者の手にも届きやすい入門書であるということからすれば, その中から労働者階級に馴染みの薄い外来語を除去することは, ごく自然な

手続きであったと言えるかもしれない。同書には、Exploitation という語は出てこない。剰余価値率について解説した同書第2篇第3章「労働力の搾取度」の原語は、Der Grad der Ausbeutung der Arbeitskraft である (Kautsky 1887, 88 頁)。マルクスが愛好したと思われる Exploitation という語は、マルクス経済学の大衆化の過程で、外来語としてドイツ語世界に定着する可能性を、マルクスの後継者によっても、大きく低下させられることとなったのである。

カウツキーは、1914年、リャザーノフらの助けを借りつつ自身が独自に編集した大衆版 (Volksausgabe) 『資本論』第1巻を刊行した。この大衆版の出版目的は「『資本論』第1巻をプロレタリアの読者に近づきやすくする」というものであった (Marx 1914, XIII 頁)。『資本論』の邦訳者として著名な長谷部文雄は、このカウツキー版『資本論』について次のように述べている。

カウツキー版の第一巻は大きな学問的価値をもつものである。その特徴の要点は、(一)、底本にマルクス生前の第二版を用いて第三・四版を参照し、また、初版本、再版本へのマルクス自身の書き入れのうち、エンゲルスが採り入れなかったものをも採り入れたこと、(二)、フランス語版 (マルクス校閲加筆) から、エンゲルスが採り入れなかった多くのものを採り入れたこと、(三)、引用文献の校訂をあらたにしたこと、などである。(長谷部 1964, 363-365 頁)

カウツキー版『資本論』第1巻の特徴については長谷部がここで指摘している通りであり、特にエンゲルスがマルクスの指示にすべて従ったわけではなかったことは、後に Marx Engels Gesamtausgabe の編集者も認めているところである (齊藤 2021, 64 頁)。もちろん、このようなことはカウツキーが編集者序文に記していることだが、しかし彼がこれらに劣らず多くのページを割いて説明しているのは、『資本論』のドイツ語化 (Verdeutschung) についてである。彼は次のように述べている。

『資本論』執筆時のマルクスにとって、英語はドイツ語と同じくらい流暢な言語であった。イギリスで育った彼の子供たちには英語が一番習熟した言語になっており、したがってマルクスにとっても英語が日々の交流の言語になった。このことは、マルクスがしばしば無意識のうちにドイツ語よりも英語を優先する、という結果をもたらした。しかし、これに加えて幾つかの事柄においては、意識的に優先する、ということもあった。彼が研究していた時代、イギリスは発達した資本主義、および資本主義理論の発達を示していた唯一の国だった。彼の学問の材料も術語、専門用語も、ほとんど専らイギリスのものであった。以上に加えて最後に次のようなことがあった。すなわち、マルクスは、西ヨーロッパの三大言語に同じように熟達していることで、どんなときにでも彼の目的に一番ぴったり合致し、彼の思考に一番正確な、洗練された、あるいは力強い表現を与えてくれるところの言語を何よりも好んで使用した、というこ

とである。それで彼はまたドイツ語を書くときに、時々フランス語の語法や、特に好んで英語の語法に準拠したが、それは過失や健忘症からではなく、自分の言葉の効果を強めるために意図的にそうしたのであった。彼の英語風の語法 (Anglizismus) は、彼の文体の本質的な構成要素になっており、これなしには彼は、あれほど心を打ち正鵠を射る彼の特性を獲得することはなかったであろう。

しかし、彼の英語風の語法がすべてこのような種類のものであるわけではない。英語に精通していない読者のもとでは容易に誤解を引き起こしてしまうが故に、不必要であるどころか有害にさえ見えるものがあつた。(Marx 1914, XXI 頁)

さらに、カウツキーは次のように述べている。

概してもっと難しかったのは、マルクスがたつぷりと使用したその他の外来語であつた。これは、英語で考える彼の習慣と一部分、関係している。イギリス人は、外来語、とりわけラテン語を我々よりもっと多く使うのである。しかし、マルクスが使つた外来語の他の大きな部分には、学者言葉、とりわけ哲学者と数学者の言葉から借用されている。

…… (中略: 引用者) ……学術的な作品を外来語なしに書くことは、場合によっては外来語をぎっしり詰め込むこと以上に骨の折れる作業である。経験の乏しい者に対しては、確かに後者の方がもっと感銘を与えるであろうし、はるかに多くの労力が含まれているかのような印象も与えるであろう。

しかし、労働者のために、学者言葉に馴染んでいない読者のために書こうとする者は、すべての余計な外来語に相当するドイツ語単語を探すことに労を惜しんではならない。(Marx 1914, XXIII-XXIV 頁)

かくしてカウツキーは、自身が編集した大衆版『資本論』において、英語風の、あるいはフランス語風の表現をドイツ語式に改め、できるだけ多くの外来語をドイツ語に直すところのドイツ語化 (Verdeutschung) を進めた (Marx 1914, XXV 頁)。

このような方針のもとでは、フランス語由来の Exploitation がドイツ語の Ausbeutung に換えられるのは避けられないことであつたのであろう。『資本論』第1巻第7章第1節の表題は、Der Grad der Ausbeutung der Arbeitskraft となつた (Marx 1914, 164 頁)。また、同第8章第3節の表題に使われていた Exploitation も Ausbeutung に換えられた (同上 192 頁)。本文においても、Exploitation はことごとく Ausbeutung に言い換えられた。見落とされたかのように、幾つか Exploitation のままとなつている個所もあるが、Exploitation の Ausbeutung への変換は注の部分にも限なく及んでいる。

もちろん、『資本論』第1巻のドイツ語化 (Verdeutschung) は、あらゆる部分について徹底

して行われた。エンゲルスは『資本論』第1巻第3版に付した序文の中で、マルクスは「私が英語の述語やその他の英語風の語法をどの程度まで取りのぞいてよいかという基準を私に与えていた」と述べていた（マルクス 1997a, 35 頁）が、カウツキーは、エンゲルスが行った作業をはるかに超えて『資本論』のドイツ語化を進めた。カウツキーによれば、これによって『資本論』は、言語的に「浄化（Reinigung）」（Marx 1914, XX 頁）されることとなった。

この言語浄化に対するカウツキーの強い思い入れは印象的なもので、そこには何か非常に強い彼の信念または執念のようなものを感じさせるものがある。相田（2002）によれば、カウツキーの民族理論は「言語としての民族」論として特徴づけられるものであり（37 頁）、「カウツキーにとって民族の決定的指標となるのは、民族感情を必然的に作り出す言語の共通性」（78 頁）なのであった。そうであるとすれば、カウツキー版『資本論』は、言語浄化を経てドイツ語化された民族主義的な『資本論』である、ということもできるかもしれない。

とはいえ、このことによってカウツキーを民族主義者として位置付けることは適切とは言えないであろう。カウツキー版『資本論』第1巻が、ちょうど第一次世界大戦勃発の年に刊行されているという事実は、この書もドイツ・ナショナリズムの影響下にあったかのような印象を与えかねないが、しかしドイツ語化された『資本論』は、ドイツ語圏の労働者階級にとって必要なものであったのみならず、非ドイツ語圏の知識人、とりわけ非ヨーロッパ圏の知識人にとって貴重なものであった。例えば、『資本論』の完訳版を日本で初めて出版した高島素之は、同書に付した「旧改訳版序文」の中で次のように述べている。

改訳については、カウツキー編纂平民版資本論が非常な助けになった。旧版序文にも断った通り、私の語学は英独二語に限られているため、その他の国語で原文のまま掲げられている脚注や引抄は如何とも歯が立たぬのであるが、カウツキーの平民版にはそれが全部ドイツ語に翻訳されているので、この点が先ず助かった。次に、言い現しの曖昧な点、難解な点や、句切りの長い処などは、すべて読者の便宜を標準として手際よく編纂されている。これらの点も出来得る限り、平民版に従ったが、然し全体の骨子は旧拙訳版通り原本第六版を基礎として、平民版の編纂秩序には準拠しなかった。（マルクス 1927, 3 頁）

また、河上肇は次のように述べている。

私はいつ頃から『資本論』に齧りつくようになったか、今確かなことは記憶していない。私が最初買って来たのは英訳本で、ドイツ語のエンゲルス版を手に入れたのは、それよりも後れている。文字通り韋編を絶つまで、何遍となく繙いたのは、カウツキー版の第一巻だ（杉原・一海 1996, 203 頁）

マルクス版のみならずエンゲルス版においても、『資本論』第1巻は外国語で満たされている。例えば、同書第4版 (Marx and Engels 1991) 本編の1ページ目、第1篇第1章第1節の出だしの文に付された注1は1859年の『経済学批判』を示すものだが、次の段落に付された注2には英語文献からの引用文が英語のまま記されている。続く注3と注4でも英語の文章が引用されており、注6にはフランス語の文が、注13にはイタリア語の長い文章が引用されている。また同じく第1篇の注65には古典ギリシャ語の文が、注92には古典ギリシャ語の詩が記され、注93にも古典ギリシャ語の文が引用されている。ちなみに続く注94はイタリア語、注95は英語の引用文から成っている。もちろん、本文では長文の外国語の使用は控えられているが、それでも短い外国語のフレーズは用いられており、古典ギリシャ語やラテン語の単語も出現する。カウツキーは、こうした外国語をすべてドイツ語に直したのである。

おそらくマルクスのような19世紀ヨーロッパの知識人にとっては、学校で古典ギリシャ語とラテン語を習い、長じては西欧主要国の言語に通じているのが当たり前だったのであろう。しかし、日本の知識人にとっては、そうではない。河上肇のような大知識人にとっても、カウツキー版『資本論』は極めて有用な版本であったものと推察される。その後刊行されたマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版の『資本論』(Marx 1947) や、マルクス・エンゲルス・ヴェルケ版の『資本論』(Marx 1962b) も、外国語文の取り扱いに関しては、カウツキー版の方式を踏襲している。

言うまでもなく、非ドイツ語圏の一般の読書人は、各国の言語に翻訳された『資本論』を読んだ。これらの各国語版においては、マルクスが『資本論』第1巻の中に散りばめた古典ギリシャ語、ラテン語、英語、フランス語、イタリア語等はすべて各国語に置き換えられている。これに対して、世界最大のマルクス主義政党を持っていたドイツで、その支持基盤たる労働者の読者が、実は世界で最も『資本論』に近づきにくかったというのであれば奇妙であろう。やはりドイツ語圏の読者にも、ドイツ語訳とでも呼べるような『資本論』が必要であったのである。そしてカウツキーが、『資本論』を言語浄化することによって、この必要に応えたのである。

ともあれ、以上のようにドイツ語からの Exploitation の排除は、マルクスの後継者たちの手によっても進められていたわけである。

6. 結論

マルクスが愛好したと思われる Exploitation という語は、結局、ドイツ語世界には根付かなかった。ドイツ語世界において「搾取」を意味する語は Ausbeutung であって、フランス語からの借用語である Exploitation は、現代では社会主義を論じる文脈においても用いられていない。例えば、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』のドイツ語訳が1950年に出版されているが、それを見ると、Theory of Exploitation (Schumpeter 1950a, 26頁) は Theorie der Ausbeutung (Schumpeter 1950b, 51頁), degree of exploitation (Schumpeter 1950a, 27頁) は

der Grad der Ausbeutung (Schumpeter 1950b, 52 頁) と訳されている。また、『サン＝シモンの教義』のドイツ語訳が1962年に出版されているが、この書に繰り返し出現し、『ドイツ・イデオロギー』や『資本論』でも使われている l'exploitation de l'homme par l'homme (人間による人間の搾取) という有名なフレーズは、このドイツ語版では Die Ausbeutung des Menschen durch den Menschen と訳されている (Salomon-Delatour 1962)。そして、1990年代にドイツで *Historisch-kritisches Wörterbuch des Marxismus* の出版が始まったが、そのとき見出し語として採用されたのは Exploitation ではなく Ausbeutung であった (Haug 1994, 735 頁)。英語世界では exploitation が英語として定着し、現在も頻繁に使用されているのに対し、ドイツ語世界では、そうはならなかったのである。

このようなドイツ語世界での状況に鑑みれば、内田義彦が人間と自然の搾取を Ausbeutung の語義に即して展開したことは、ごく自然な手続きであったと言えるであろう。マルクスは Exploitation と Ausbeutung の両方を使用したが、その後のドイツでは専ら Ausbeutung が使用されるようになった。この歴史的事実は、生き残った方の語に対して、用語としての正統性を付与しているように見える。特に内田にとっては、社会科学の用語が日常語とオーバーラップしていることが重要であった。この点について、内田は次のように述べている。

社会科学の作品は、それを作るほうでも、日常語を背景にして、日常語に含まれているいろんな意味を抽出しながら、それを社会科学の用語として使ってゆくほかない。理解するほうでも、——今度は逆の形をとりますが——受け取った社会科学の用語を、日常語と結びつけながら理解するほかない。(内田 1971, 33 頁)

もちろん、社会科学においても専門家向けに書かれた学術論文の用語は、厳密に定義された専門用語として日常語からは区別されるが、内田によれば、『資本論』は、「専門家向きの専門書」ではなく「一般読者に向けて書かれた作品」であって、マルクスは「その制作物が、思想の作品として、直接一般読者ととどき一人一人のなかでコペルニクスの転換がおこることを念願として書いた」のであった (内田 1981, 46 頁)。そしてその際、内田が言うコペルニクスの転換とは次のようなことである。

単一の思想の用語のなかに、日常語の諸用例が含みこまれていて、その一つの思想の用語によって、日常語のなかに散らされ眠っていたいろいろの事態が突如として読者の中で呼びさまされ、世界と自分とがまったく新たな地平に立って見える (内田 1981, 39 頁)

このような読者の中での「コペルニクスの転換」が、『資本論』のような「思想の作品」においては、日常語を通じて惹起されるのである。であるとすれば、『資本論』の「搾取」の原語

は、フランス語からの輸入語である Exploitation よりも、その動詞形が分離動詞となるところの、ドイツ語らしいドイツ語である Ausbeutung の方が、内田にとって好都合であったということになるであろう。

内田義彦が、『資本論』の思想を解説した『資本論の世界』において、Exploitation ではなく Ausbeutung を用いて論を展開したことの背景には、以上のような事情があったものと推察される。

最後に、次の点を付け加えておきたい。

内田義彦のアウスボイトゥング論は、一時代を築いたところの極めて優れた論考であり、このことに疑いの余地はない。しかしそれは、『資本論』をマルクス版『資本論』に限定するならば、必ずしも著者の意図に則した論述であったとは言えないかもしれない、という疑いが残る。前項で見たように、マルクスはドイツ語、フランス語、英語を自在に使いこなし、これらの言語の中から、自分の思想を最も適切に表現する語を選び取る人であった。カウツキーのこの証言が正しいとすれば、「労働力の搾取度」は、カウツキー版の *Der Grad der Ausbeutung der Arbeitskraft* ではなく、やはり *Der Exploitationsgrad der Arbeitskraft* でなければならないはずである。内田は、『作品としての社会科学』において、「近代資本主義のもつ自然力の開発・略奪（アウスボイトゥング＝エクスプロイテーション）的性格」（内田 1981, 175 頁）と記している。確かに、Ausbeutung と Exploitation をイコールで結ぶことは可能である。実際、マルクスはフランス語版『資本論』において、訳者が Ausbeutung をフランス語の exploitation に変換することを認めている。しかし、Ausbeutung の exploitation への変換が認められたからといって、Exploitation の Ausbeutung への変換もが同様に認められるとはかぎらない。もし仮に、カウツキーが Exploitation を Ausbeutung に置き換えていくのをマルクスが横で見ているとしたら、果たして彼は快くこの作業を後押ししていたであろうか。この点について、私は少なからざる疑念を抱いているのである。

とはいえ、古典ギリシャ語のテキスト読解によって博士論文を書き、フランス語で最初の単著を出版し、英語で思考しながらドイツ語で『資本論』を書いたというマルクスの頭脳は、東洋の常人には測り知れないものがある。よって、なぜ Exploitation でなければならなかったのか、この点についてはここでは深入りしないでおくこととしたい。

引用文献

相田慎一（2002）『言語としての民族—カウツキーと民族問題』御茶の水書房。

内田義彦（1962）『増補 経済学の生誕』未来社。

内田義彦（1966）『資本論の世界』岩波新書。

内田義彦（1971）『社会認識の歩み』岩波新書。

内田義彦（1981）『作品としての社会科学』岩波書店。

大村泉（1998）『新 MEGA と＜資本論＞の成立』八潮社。

カウツキー、カール（1955）「自伝」『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 14 カウツキー／プレ

- ハーノフ』河出書房。
- カウツキー, カール (1999) 『マルクスの経済学説—「資本論」入門』相田愼一訳, 丘書房。
- 齊藤彰一訳 (2021) 「翻訳: マルクス・エンゲルス新全集第二部第8巻序文」『アルテス リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要) 第108号, 2021年6月, 61-77頁。
- 杉原四郎・一海知義編 (1996) 『河上肇自叙伝』(一), 岩波文庫。
- スティーンソン, ゲアリ・P. (1990) 『カール・カウツキー 1854-1938 古典時代のマルクス主義』時永淑・河野裕康訳, 法政大学出版局。
- 橋本直樹 (2016) 『「共産党宣言」普及史序説』八潮社。
- 長谷部文雄 (1964) 「解説 『資本論』の原典と翻訳」『世界の思想 20 マルクス 資本論 3 第三部上』長谷部文雄訳, 河出書房, 363-377頁。
- マルクス (1927) 『資本論』第1巻第1冊, 高島素之訳, 改造社。
- マルクス (1997a) 『資本論』第1巻 a, 資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社。
- マルクス (1997b) 『資本論』第1巻 b, 資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社。
- マルクス, エンゲルス (1968) 『マルクス = エンゲルス全集第20巻』大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店。
- Bazard, A. et al. 1831. *Doctrine de Saint-Simon. Exposition. Première année. 1828.-1829.*, Troisième édition, Paris: Au bureau de l'Organisateur.
- Haug, Wolfgang Fritz, herausgegeben. 1994. *Historisch-kritisches Wörterbuch des Marxismus*. Band 1. Hamburg: Argument-Verlag.
- Kautsky, Karl. 1887. *Karl Marx's Oekonomische Lehren*. Stuttgart: Verlag von J. H. W. Dietz.
- Marx, Karl. 1914. *Das Kapital: Kritik der politischen Oekonomie*. Erster Band. Buch I: Der Produktionsprozeß des Kapitals. Volksausgabe. Herausgegeben von Karl Kautsky. Stuttgart: Verlag von J. H. W. Dietz Nachfolger, G. m. b. H.
- Marx, Karl. 1947. *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*. Erster Band. Buch I: Der Produktionsprozess des Kapitals. Herausgegeben von Friedrich Engels. Volksausgabe. Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau. Berlin: Dietz Verlag GmbH.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1958. *Karl Marx / Friedrich Engels Werke. Band 3*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1962a. *Karl Marx / Friedrich Engels Werke. Band 20*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1962b. *Karl Marx / Friedrich Engels Werke. Band 23*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1987. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA). Zweite Abteilung. Band 6*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1989a. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA). Zweite Abteilung. Band 7*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1989b. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA). Zweite Abteilung. Band 8*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1991. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA). Zweite Abteilung. Band 10*. Berlin: Dietz Verlag.
- Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1992. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA). Erste Abteilung. Band 20*. Berlin: Dietz Verlag.
- Salomon-Delatour, Gottfried, herausgegeben. 1962. *Die Lehre Saint-Simons*. Neuwied: Hermann Luchterhand Verlag.
- Schumpeter, Joseph A. 1950a. *Capitalism, Socialism, and Democracy*. Third edition. London: George Allen & Unwin Ltd.
- Schumpeter, Joseph A. 1950b. *Kapitalismus, Sozialismus und Demokratie*. Zweite, erweiterte Auflage. München: Leo Lehnen Verlag GmbH.